

2021年 1月8日 金曜日

# 知・技の ものづくり大学発 創造

▷62◁

本学で「日常墓地研究室」の看板を掲げている土居は、そもそも墓地の近代史を専門としており、現在も継続しています。今年から都の公園審議会墓園専門部会に委員として関わり、墓地の来し方だけではなく、行く末も考える機会をいただいています。

近代に企てられた墓地の将来構想は、平成に入った辺りから、軌道修正を余儀なくされています。徳川時代、幕府や藩が用意すべき墓地はほぼ皆無で、せいぜい江戸や京都など大都会での身元不明死体部を頓挫しつつも大枠は引

ところが維新後には、諸々の事情で墓地が公共で提供されるべきことになり、将来構想を含め議論が重ねられてきました。東京では、関東大震災を契機に個々の墓の安全性も考慮する必要が生じ、その後、戦災への備えも考えざるを得ない時代を経て、基本構想は戦後へと継承されま

した。寺院に任せることで、済みます。寺院に任せることで、済みます。

き継がれてきたのですが、時代が平成へと変わった辺りから、基本構想のものの大前提が揺らぎ始めました。平たく言えば、家（家族）で墓を継承することが困難になつたのです。いわゆる家族構さほど表立つては議論されにくいました。

たゞ言えども、墓に支えるのか。あるいは、支つてはいけない」とを判断するのか。ト青海展示棟で開催された冠つけ先日、東京ビッグサイトで開催された冠葬祭業界の展示会「セレモニ

土居 浩 建設学科教授

ご先祖さま支えるモノ

成の変化ですが、その背景に ませんが、皆が薄々とは気づく  
人口構成の変化がありま いている大問題です。  
二、「ジャパン」へ訪問した折  
に、遺骨を家内で安置してお



じ、ひろし 博士（学術・総合研究大学院大学）。ものつくり大学教授。2001年、大学開学時から着任。関心領域は、日常意匠論。

けるタイプの仏壇（のような  
モノ）を、複数の業者が提案  
しており、あたかも屋内の墓  
のようだ、興味が惹かれまし  
た。

なるほど、では仏壇は「れ  
祖廟舍」と呼ばれます。ただ基  
本的に屋内施設なので、存在  
のかを振り返り「う」とした  
ところ、墓・墓地ほどには研  
究蓄積がないことに、気づき  
ました。（ここで仲間と相談し  
私が研究代表者として国立歴  
史民俗博物館に「家内における  
死者祭祀・祭奠の現在とそ  
の歴史的検討」を応募したと  
ころ、ありがたいことに採択  
されました。）

この「家内における死者祭  
奠」とはつまり仏壇ですが、  
家屋への造り付けもあります  
し、家の宗旨が神道であれば  
祖廟舍と呼ばれます。ただ基  
本的に屋内施設なので、存在  
のかを振り返り「う」とした  
ところ、墓・墓地ほどには研  
究蓄積が少ない点が、研究蓄積も少な  
い理由の一つです。何より、  
のままだと仏壇と対応「して  
きた」とてもきちんと記録さ  
れず、消失してしまったのは  
ないかと懸念されるばかりで  
す。皆様からの情報を求める  
所以です。